

大人をなぶんのもええかげんにせえ

(対戦前夜)



高二の夏、兵庫県の夏大会が始まって、ベスト八まで進んだ。

優勝候補のH高にあたる前夜。家の近くの銭湯で、近所の野球好きのハヤシさんが話しかけてきた。

私が尼西高の野球部というのは、知っている人で、大庄西中時代からの銭湯仲間でもあった。

「今、どうやねん。勝ってんのか」

当時は試合結果の速報がなくて、翌朝の新聞が最新の情報だった。

「はい。勝っています。」

「明日はどことやるんや。」

「H高です」

甲子園の常連で全国的にも、“逆転のH高”で有名だった。

「へえ、そうか。まあコールド負けだけにはなるなよ」

試合当日。

九回表にベンチ前で円陣を組んだ。二点リードでは心許無い。

「同じ高校生や」

「部員百人が、どないした」

「野球は九人おったら十分や」

「オール二年のどこが悪い」

「バッターボックスでは、絶対逃げるなよ。這いつくばっても塁に出よ
うぜ」

「ホーム抱えて、背中踏まれても一点もやらん」

「氣力を以って、之にあたるーや」

半端ない個性の面々が、まくし立てた。

その夜。昨日より早い時間に風呂屋に行くと、ハヤシさんが湯船に入

っていた。

湯船から、私に、

「おー。やけに早いな。やっぱりなあ。で、どうやったんや」
言った後に、急に言葉を改めた。

「そうそう、どうだったかな？」

H高とやれたんだからー

まあ、仕方ないじゃんー

対戦しただけでも大したもんだよ」

標準語になった。

今まで、聞いたことが無いハヤシさんに、戸惑った。

「ハイ。十一対二でした」

「おお。そうかそうか。

二点も取ったんか。

よう取ったなあ。ようがんばった」

拍手をしてくれた。

「ハイ」

返事はしたものの、勝ったのは私の方だと言うタイミングを失った。

ハヤシさんも次の言葉を探している風だったが、私が言い出しにくいのを察したのか、ハヤシさんの方から、

「で、どうやって二点取ったんや」

優しく訊いてきた。

「ハイ。二点はH高です。僕らが勝ちました」

と応えると、

「大人をなぶんのもええ加減にせえ」
凄じ劍幕で、湯船から出て行つた。

ハヤシさんの誤解は、明日の朝刊で分かつて貰おうー
「あのH高に、オール二年の九人で勝つたんか。

私も朝、確かめるー」

私の体が急に湯気で火照つた。